

## 学位請求論文（課程博士）審査報告書

氏名・（本籍地） 春本 龍彬（茨城県）  
学 位 の 種 類 博士（仏教学）  
学 位 記 の 番 号 甲第 133 号  
学位授与の日付 令和 4 年 3 月 15 日  
学 位 論 文 題 目 廬山寺蔵『選択集』の研究  
論 文 審 査 委 員 主査 林田 康順  
副査 曾根 宣雄  
副査 石川 琢道  
副査 上杉 智英

### 論文の内容の要旨（1200字以上）

本論は今から八〇〇年以上前、鎌倉時代の初め、浄土宗の開祖である法然上人（以下、祖師の尊称を略す）が撰述した『選択集』、とりわけ京都市上京区の寺院、廬山寺が所蔵する『選択集』（「廬山寺本」）に着目し、『選択集』について論じたものである。

『選択集』には、当麻寺奥院が所蔵する『選択集』（「往生院本」）、鹿ヶ谷法然院が所蔵する『選択集』（「延応版」）、江戸時代初期から中期にかけて活躍した学僧義山が開版した『選択集』（「義山版」）など固有の特徴を有する様々な種類の本が存在しているが、中でも「廬山寺本」は、現存最古の写本にして、行間をはじめとしたあらゆる場所に推敲跡と見られる書き入れが数多く遺っている状況から、法然撰述時の草稿本と評価されている国指定の重要文化財（旧国宝）である。

そのため、「廬山寺本」に焦点をあてて『選択集』を捉えていく態度が史実把握の上では必要不可欠であると考えられ、これまで『選択集』撰述の真相を明らかにするべく、「廬山寺本」に関する研究が数多く行われてきた。しかし、「廬山寺本」の現状が複雑であるため、「廬山寺本」の研究は未だ発展途上にあり、書誌の評価、他本との比較考証、推敲跡の議論などは充分とはいえない。そこで筆者は、「廬山寺本」の实地調査や津島市西光寺の地藏菩薩像体内から発見された新出資料である『無量義経』に基づくなどして、「廬山寺本」の書誌を今一度整理した上で、分析の余地がある「廬山寺本」の推敲跡を対象として考察し、さらに「廬山寺本」と他本を新たに系統論的な視点から思索することで、「廬山寺本」の研究を体系的に発展させ、『選択集』の展開過程をたどっている。

本論は三章で構成されている。

第一章では「廬山寺本」が如何にして形作られ、現在に至るまでの変遷について明らかにしている。第一節では著者が行った实地調査に基づいて「廬山寺本」の現状を確認している。第二節では「廬山寺本」の状態から逆算し、その原装が折紙綴葉装であったと論じている。第三節では津島市西光寺所蔵の『無量義経』を参照して「廬山寺本」の筆跡を見直すと共に「廬山寺本」と他の文献との兼ね合いを検討して「廬山寺本」撰述時の筆録者は法然・遵西・感西・証空の四名であり、かつ筆録にあたっては和文体の手控えを漢文体へ直す、口述筆記をする、原典の引用をするなどの方法が用いられたと論じている。第四節では「廬山寺本」に遺されている書き入れを分析し、「廬山寺本」には撰述時から後世まで五月雨式に書き入れが施されていたと考察している。第五節では様々な文献に登場する「廬山寺本」関連の情報に基づき、最低でも「廬山寺本」が法然→円道房→高山寺→顕光院→清浄華院→皇室→廬山寺の順番で伝持されていたと述べている。第六節では修復の記録を伝える「廬山寺文書」や『重要文化財修理報告書』などを参照して「廬山寺本」が江戸時代と平成時代に二度大きく修復されていると言及している。小結では折紙綴葉装の体裁をしたものに法然をはじめとした筆録者が様々な方法で文字を筆録し、それと平行して文字を適宜修正していった末に「廬山寺本」が完成し、完成後にもいろいろな場所、あるいはいろいろな人物によって管理され、その中で訓点などが書き足されたり、体裁が変更されたりして今に至っていると

結論づけている。

第二章では「廬山寺本」に遺されている推敲跡の実態を詳らかにしている。第一節では第一章段における師資相承の問答の裏書を取り上げ、道綽善導流の教えは印度伝来であると主張し、且つ第一章段と第二章段以降の確かな連続性を形成するために師資相承の問答が追記されたと論じている。第二節では第三章段における本願成就の問答の削除に注目し、一々の願成就文を例示しながら経文の意義を強調するために問答が見せ消ちされたと考察している。第三節では第五章段末尾に確かめられる「有智賢哲思之応知」の見せ消ちに焦点をあて、当初は論理的な確信を表現し、読者の理解を促進する目的で「有智賢哲思之応知」の一文を使用したのが、後に人間観を優先するために「有智賢哲思之応知」の一文を消去したと指摘している。第四節では第九章私釈段における四修の説示に推敲が施された背景には源信教学からの脱却、および善導教学の積極的受容があったと言及している。第五節では第十二章私釈段において加えられた廃立の説示を取り上げ、善導教学への極力の準拠を試みると同時に廃立義の立場を推奨し、しかも論理的枠組みの正統性を主張するために廃立の説示が足されたと論じている。第六節では第十二章私釈段で消去された『無量寿経』と『観無量寿経』の説示順序についての議論である「寿観二経説示前後論」を扱い、「廬山寺本」に認められる特有の説示に注目し、その内容は願数の相違を思慮していたからこそ説示されたと指摘している。第七節では第十五章段における『観念法門』の引文に焦点をあて、最初は護念にまつわる新たな内容を展開したので「此是亦現生護念増上縁」という一文が書き記されたものの、最終的には一貫性を保持しつつ、増上縁の語義概念を明確化するために「此是亦現生護念増上縁」という一文が消去されたと指摘している。第八節では第十六章私釈段における選択我名の説示を取り上げ、選択我名の位置づけに配慮して接続詞を変更し、続けて一度は章段の説示と選択義の整合性、あるいは道綽教学の影響を考慮して文章の作成自体を取りやめたが、結局は選択義を敷衍するため再び文章の作成を実施したとしている。小結では本論の考察と先行研究の成果を踏まえ、「廬山寺本」撰述時に法然が修学を経て理解した仏教に対する確信と未解決の問題に対する不安との間で葛藤を感じながらも、称名念仏による阿弥陀仏の極楽浄土への往生を説明するため、できる限り善導教学に立脚することが必要不可欠であり、更に本願に誓われている念仏の実態を一層詳しくするべく、選択義を可能な範囲で委細に述べるのが最適であるという思想を有していたと指摘し、それが特に法然自身の善導教学への理解を深化させていった結果、その推敲の痕跡が「廬山寺本」に遺されていると結論づけている。

第三章では「廬山寺本」と他本の位置づけを詳らかにしている。第一節では「廬山寺本」と他本の対校結果を提示しつつ「廬山寺本」の特徴を浮き彫りにし、それと他本の状況を照らし合わせることで「廬山寺本」と良忠が「広本」などと呼称した本、義山が「稿本」と表現した本、大谷大学所蔵の「禿庵文庫本」、大東急記念文庫所蔵の「大東急記念文庫本」が親密な関わりを持っている様子について確認している。第二節では「広本」に焦点をあて、「広本」の内容や龍谷大学所蔵の「存覚相伝本」の性格を整理した上で、「寿観二経説示前後論」における字句の差異から「廬山寺本」と「広本」は初稿本と中書本の関係にあり、「広本」から「存覚相伝本」が生じたと指摘している。第三節では「稿本」に注目し、義山が開版した「義山版」跋文の解釈を検討しつつ、義山が「廬山寺本」を閲覧していた状況を示唆する資料を考察した結果、「廬山寺本」と「稿本」は同一であると指摘している。第四節では「禿庵文庫本」を取り上げ、「禿庵文庫本」が「廬山寺本」の特徴を継承すると同時に「廬山寺本」における文章訂正の指示をほぼ全て反映しており、しかも「廬山寺本」に見られる長文の欠文を補完していることから、「廬山寺本」と「禿庵文庫本」は定稿本と清書本の間柄にあり、「禿庵文庫本」の対校本は「広本」系統の本であって、「廬山寺本」から「広本」、続いて「広本」から他本へ展開していった流れと「廬山寺本」から「禿庵文庫本」へ展開していった流れが別々に存在していたと指摘している。第五節では「大東急記念文庫本」に着目し、「大東急記念文庫本」の正体が建暦年間（1211、3～1213、12）に開版された「建暦版」であると指摘し、「大東急記念文庫本」が「広本」系統の本であると理解できるため、「廬山寺本」と「大東急記念文庫本」、言い換えれば「建暦版」は原本と刊本という間接的な関わりが認められると述べている。小結では「廬山寺本」から派生した本が「広本」や「禿庵文庫本」であるのは間違いのないものの、それぞれが異なる状態の「廬山寺本」を起点としており、更に「広本」からも二つの系統に分かれる幾つかの本が派生していて、かつ本章で取り上げなかった「往生院本」「延応版」「義山版」などは、少なくとも「広本」「禿庵文庫本」「大東急記念文庫本」（「建暦版」）より内容的に「廬山寺本」から遠い存在であると結論づけている。

以上の点を踏まえ、総結では『選択集』の展開過程をめぐって以下の整理を施している。

『選択集』の撰述は、九条兼実から法然へ要請があり、法然が九条兼実の要請に応じる形で開始されたと判断して間違いない。また、「廬山寺本」の本文と東大寺講説「三部経釈」や『逆修説法』

の本文を対照すると、多くの内容が重なるので、撰述にあたっては東大寺講説や逆修法会などで参照したであろう手控えを使用したと思われ、あわせて口述筆記や原典からの引用作業などに取り組んだ結果、『選択集』は成立したと指摘している。そして、『選択集』が一通り形になった後に行われたのが内容の更新であり、それを反映させた複製本の生成であったと捉えられるとし、内容が断続的に変わっていった理由は、「廬山寺本」撰述における法然の思想が主に法然自身の善導教学に対する解釈を漸次深めていったからであると指摘している。また複製本の書写にあたっては、「廬山寺本」に次いで、まず推敲半ばの「廬山寺本」に基づいた「広本」を代表とする種類の本が作られ、続いて推敲終了後の「廬山寺本」に基づいた「禿庵文庫本」を代表とする種類の本が作られたと指摘し、複雑な展開過程をたどった『選択集』は成長する書物となったと結論付けている。

以上の内容となる本論に対し、令和3年12月1日の予備審査を経て、令和4年1月21日に口述試問が実施された。副査の曽根宣雄先生からは、高山寺明恵による「廬山寺本」閲覧の可能性、増上縁の概念、八種選択における選択我名の位置づけなど、石川琢道先生からは、和文体の手控えの状況、菩提流支の位置づけ、論文内におけるあいまいな表現方法の多用など、思想的・歴史的側面を中心に多彩なご質問をいただき、上杉智英先生からは、折紙綴葉装から導かれた結論を巡り、紙の束となる括り、共紙表紙、文字写り、間剥、漢文の読みなど、特に書誌学的視点から詳細な質問をいただいた。主査林田からは、「廬山寺本」推敲時期確定の可能性、推敲内容を巡る結論をめぐる先学所論との差異、『選択集』を「成長する書物」と位置づける妥当性等、本論を俯瞰した上で章毎の総合的な質問があった。今後の検討を必要とする質問も多くあったものの、春本氏からは現時点において適切な回答がなされた。

口述試問の後、主査・副査による評定のを設け、「大正大学学位論文審査内規」の中、第3条 修士及び博士の学位論文審査基準は、次のとおりとする。

- (1) 仏教学研究科（中略）
- (2) 仏教学専攻博士後期課程（課程博士）
  - ・研究対象と研究目的が明確であること
  - ・研究目的に応じた適切な研究方法が採用されていること
  - ・研究資料が適切であり、分析や考察が適切であること
  - ・先行研究を的確に検討していること
  - ・論理と叙述に整合性と一貫性を有し、形式や表記が適切であること
  - ・客観性と独創性を有し、当該分野に大いに寄与する内容であること
  - ・将来にわたって継続的に発展可能な研究内容であること

といった全7点の審査基準にそれぞれ照らし合わせて検討を行った。

- (1) 本論の研究対象と研究目的については、法然の名著『選択集』の草稿本である「廬山寺本」とその総合的解明として明確である。
- (2) その研究目的に応じた研究方法については、書誌学的視点・文献学的視点・歴史的視点・思想的視点の手法を個別的・総合的に用いており適切である。
- (3) 本論における研究資料やその分析・考察については、最新の科学的分析手法を取り入れて原史料の究明にあたっており、適切である。
- (4) 「廬山寺本」を巡る膨大な先行研究についても渉猟の上、的確に検討を施している。
- (5) 本論の論理と叙述は整合性を持ち、全体として一貫性を有しており、その形式や表記についても適切である。
- (6) 本論の内容は客観的であり、独創的な論理を展開しており、『選択集』をはじめとする法然教学、広くは浄土教史の研究に大いに寄与する内容である。
- (7) 本論のテーマは、将来にわたって継続的に発展可能な研究内容である。

以上、いずれの点においても春本氏の提出論文はその基準を満たしていることが確認された。とりわけ、春本氏の提出論文について各先生から、書誌学的視点・文献学的視点・歴史的視点・思想的視点を個別的・総合的に用いている手法に高く評価があり、今後の発展に大いに期待する意見が相次いだことを付け加えておきたい。こうしたことから、主査・副査全員の総意をもって、春本龍彬氏による学位請求論文「廬山寺蔵『選択集』の研究」を課程博士論文として認め、報告するものである。

日 程	令 和                      年                      月                      日
公表形態	① 掲載誌名：【                      】【                      】号・巻    【                      】頁    【全文・要約】
	② 単著（発行者）
題 目	<※タイトルを変更した場合>